

	<p>「山川草木悉有仏性」</p> <p>と桐の箱</p> <p>SCE・Net 横山哲夫</p>	<p>E-140</p> <p>発行日 2021.3.12</p>
---	--	--

法事でお坊さんから日めくりを頂いた。日めくりと言ってもカレンダーではなく「心の暦」である。ありがたい仏教の教えが1ヶ月分の日めくりになっている。その19日目に印刷されているのが「山川草木悉有仏性（さんせんそうもく、しつうぶっしょう）」である。文字通り、山や川、草木にも仏が宿ると

言う有り難い教えである。日本では、山川草木にかかわらず、あらゆるものが仏様になったり神様になったりする。人は亡くなれば、もれなく仏様になれるし、大きな石や木が神様であったりする。そうかと思えば、戦国武将や犬や猫までが神様になる。八百万の神、賑やかである。

話は変わるのだが、お線香やお酒の箱に桐の箱が良く使われている。箱の表には、お線香やお酒の名前が金文字で印刷されていて、高級感が漂う。しかし、お線香もお酒もいつか無くなる。特にお酒などはあっという間になくなる。お酒の瓶は資源ゴミに出せるのだが、高級感漂う桐の箱は我が家に残る。その箱を前に、これまた仏教の有り難い教えの「勿体無い」が頭をよぎる。何かに利用出来ないかとも考えるのだが、お線香やお酒が入っていた箱であるから、使い勝手が悪い。それに当然だが、桐の箱は「木」である。したがって、仏様が宿っているわけだ。となると粗末にできない。そうだ仏教では「勿体無い」だが、ヨガでは「断捨離」だ、と思うのだが、昭和世代のわたしの頭の中では「勿体無い」が勝つ。きっとわたしが仏様になったあとには、ゴミ屋敷が残るであろう。

そんな時、出張先で読もうと思って、キヨスクで本を買った。「眠れないほどおもしろい日本の仏さま」という題名の本である。確かに面白い。仏様と言ったらインドの王子様が修行して悟りを開き、お釈迦様になったのだと思っていたのだが、すごい数の仏様がいる。宇宙の全てを照らしている奈良の大仏様を筆頭に、その弟子と言うか部下と言うか数え切れないほどの仏様がいて、お釈迦様もその一人である。更にそのお釈迦様の一番弟子に菩薩様がいる。仏様になる一歩手前で修行に励んでいる慈悲深い仏様で、亡くなった人をあの世に導いてくださる、とても優しい仏様である。そこで考えた。この世にいる間に何か善行を行い、菩薩様にあの世に連れて行って頂こう。そうだ、桐の箱で菩薩様を作ろう。そうすれば、ありがたい桐の箱を捨てることもない。



しかし、仮にも仏様を作るのであるから、菩薩様とは一体何者かを知らなければならない。本やネットでにわか勉強をする。これまた凄い。地藏、文殊、普賢、弥勒、百済、馬頭、千手、十一面、如意輪、虚空。全て菩薩様の名前である。仏様には男女の区別はなく、人をはるかに超越した存在と語る本もあれば、菩薩様は女性のように見えるが実は男性であると語る本もある。そうかと思えば、慈悲の心で人に手を差し伸べるため、手が千本生えたとか。一体どこに焦点を当てて、菩薩様を作ったら良いのか。



しかし、上野の西郷さんを作った高村光雲の菩薩様はどう見ても女性に見えるし、手は二本である。国宝の百済観音や広隆寺の弥勒菩薩も、顔はもとより、なで肩やしなやかな指先は女性そのものである。決めた、高村光雲の観世音菩薩像をお手本に菩薩様を作ろう。

まず、集めた桐の箱をバラバラにして、木工ボンドで貼り付け、ひと塊にした。次にノミやカンナで概形を作った。そんな折、更にわたしのイメージにぴったりの菩薩像を描いた本を見つけた。

周兆昌（しゅうちょうしょう）著「観世音菩薩伝（人間・観音様の生涯と思想）」である。実は、菩薩様は中国西域の興林国の第三大妃で、名前を妙善と言った。一心に仏様に帰依し、修行をし過ぎて、父の妙莊王から疎まれる。それにもめげず更に精進し、菩薩道を成就する為、保母と尼の永蓮と三人で須弥山（しゅみせん）を目指す。途中、怪物に襲われそうになり白象に助けられたとか、砂漠を横断するとか、とてもドラマチックな物語で飽きない。巻末には「観世音菩薩、須弥山求道工程図」なるものも印刷されているし、1932年に発見された御真影の写真もある。また、菩薩道のキーワードとなる「白蓮」を求めての旅であったことも良くわかった。何れにしても伝説であるから真実か否かはわからない。



桐は弥生時代から木材として使われていて、登呂遺跡からは桐で作られた琴も発見されている。また、桐は皇室や日本国の紋章や貨幣の装飾などにも使われていて、女の子が生まれたり桐の苗を植え、その桐で作った箆箆を嫁入り道具に持って嫁ぐと言う習慣もあったようだ。桐の箱が贈答品の箱として使われるようになったのも、そのような理由かも知れな

い。菩薩様作りにふさわしい材料である。

人形作りは顔が命と言われる。背中では完成しても見えないので、練習に丁度良い。顔は後回しにして、まずは背中から彫り始めることにした。桐は他の木材に比べて軽いし、彫刻し易いと思っていたが、然にあらず。当然であるが年輪があって、その部分は硬い。それに色々な桐の箱を壊して貼り合わせてあるので、結構ばらつきがある。前途多難。「これは修行だ！」と、自分に言聞かせ、彫り進めた。

仏教には「般若心経」と言う、ありがたい御経がある。西遊記で有名な玄奘三蔵がインドから持ち帰った600巻ほどの経をまとめたものと言うが、実はこの御経、菩薩様と関係が深い。

ある日、お釈迦様の前で、菩薩様が弟子の舎利子に「悟り」を開く意味を説く。般若心経はその場面を描いた御経である。有名な一節が「色即是空 空即是色」であるが、私なりに解釈すると「どうせこの世の中、たいしたことはない。大変かも知れないが、気楽に行こうじゃないか。」と人々にエールを送っている御経と思う。コロナ禍のなか、色々なことを考えながら、菩薩様を掘り進めていった。最後に光背の裏に二百六十余文字の般若心経を彫って、わたしの菩薩様は完成した。



2020年12月4日放送のNHK「チョコちゃんに叱られる」で、お坊さんはなぜ御経を唱えるのかと言う素朴な疑問に焦点を当てていた。ほとんどの人が、御経とは、亡くなった人が極楽浄土に無事に行けますようにと、お坊さんが仏様をお願いしていると思っているだろう。実は私もそう思っていた。しかし、般若心経の中にはそのようなことは書いていない。御経の多くは、大事な人が亡くなって気を落としている人たちに「気を落とさずこの世で頑張ろうよ。」とエールを送っているのである。



完成写真

高野山のお坊さんが「観音菩薩の転生系譜」とも言われるチベット仏教のダライ・ラマに、仏教の真髄とは何かと質問している場面をユーチューブで見た。それに答えて、ダライ・ラマは「思いやり」と答えた。コロナ禍の今、大事な一言であると思った。

参考図書

- ・並木伸一郎 著 眠れないほどおもしろい「日本の仏様」
- ・周 兆昌 著 観世音菩薩伝 人間・観音様の生涯と思想